



数字の「7」

数字「7」たくさん出てくることばをどう扱うか。

2020.3.13

- ・ 語句辞典
 - ・ 検索 - 原語で
 - ・ gengodekensaku.com
 - ・ STDの番号 Lexicon (辞書)
 - ・ Logos - レン? Lemma
 - ・ 語彙形態素 (見出し)
 - ・ go - go, goes, going, went, gone
 - ・ 最初にでてくる原語は? (初出)
 - ・ たくさんでてくる原語は?
 - ・ いっしょにでてくることばは?
 - ・ 分けて、同じ/違う。
 - ・ 数字 ... 単位、日、週、月、年、回、度、人 ...
-
- ・ 安息日
 - ・ Lビ記、民数記、ヨハ27、黙示録
 - ・ ヨバ10年、祭11、仮庵祭、
 - ・ ヨハネ福音書?
 - ・ 7 ... 7×7=49, 70, 7×70=490
 - ・ 完成、完?、系統11、完全、全人、充分
 - ・ 豊富、全世界、7の民、7人執事 ...
 - ・ 7つの恵臺王いや、7度ききぬ、
 - ・ 211? 51144

・ <ら心子、連想する、>に子、重なり
 数字で何か(他の箇所)と1-5を連想させ、
 ・ ことばは生きている、成長している。
 X 辞書的に「7は完全、完結」とは捉えなす。

聖書には、数字の7、7がたくさん出てきますね。聖書にたくさん出てくる言葉をどう扱ったらいいのかということ、この数字の7を通してちょっとまとめてみました。

何かの言葉、例えば愛とか義というものはたくさん出てきすぎて、全部並べて見るには数が多すぎるという時に、そういうものをまとめた語句辞典というのが、聖書に関してありますので、その本を見て調べる。誰か編集した人がいて、いろんな箇所をたくさんあったものを分類してまとめてくれてる役に立つものがありますけれど、結局、それも自分で確かめないと自分の言葉になりませんので、それを確かめる方法ということで見えていきますね。

検索をするのです。聖書で。聖書を検索するのですけど、今はみんな自分でできますよね。

無料のサイトもたくさんあるから。「原語で検索」とかで検索するんですけど、日本語で検索する時は、漢字の「七」という数字で探すということです。数字の「7」で探すと、何千763みたいのも出てきちゃいますから、そうじゃないね。じゃあ、英語で探したら「seven」で探すのですけれど、sevensとか、seventyとか、いろんなものがありますので、原語で探すということをしていいたいですね。

原語で検索ドットコム (<https://gengodekensaku.com>) さんは、例えば、創世記2章の7日目、7という数字を見て、そのsevensのところの番号が、ストロング博士がつけてく

れた番号なので、その番号で検索するということをすれば、旧約聖書を一応見れるかなということ。ただ、sevenとseventyとまた別のsevenみたいなものもあるみたいなので、いくつか丁寧に見ないといけないですね。

このストロングさんの番号は何かと言うと、レンマLemmaっていう専門用語があるのですけれど、語彙の分け方で、形の元。英語のgoで言うと、go、goes、going、went、gone。これは「go」という一つの形態素、語彙素で検索できるので、このレンマがgoというようになってるものを探すと、goもgoesもgoingも全部出てくるんです。それがレンマというもので、その集まりがlexicon (辞書)。

辞書と見出し、レンマというのは見出しみたいな感じですかね。ストロング番号は、このgoというものに番号がついてるということです。goとgoesとgoingは分けられないのです。それが、ストロング番号です。

ストロング番号は19世紀のもので、ロゴスLogosの方は、もっとコンピューターも進んで文章の形態解析が進んだので、もっと正確になっています。ですから、ロゴスLogosというものを使うのがいいかなと思います。

<https://www.logos.com/>

ただ、日本語は一緒に出てきませんので、両方を併用しています。そうやって、いくつかある形態素のレンマをちゃんと見ないといけないんですけども、それでも最初に出てくる箇所はどこかなと、初出ですね。これがその言葉の種みたいな役割をしますので、最初に出てくる箇所はどこか、これは大切です。

それと、検索した後に、たくさん出てくる固まってる箇所というのがあります。その固まって出てくる箇所は、特に、その言葉について説明しているという箇所になりますから、それはどこなのかいうことは特定しないとけない。それと、一緒に出てくる言葉というのがあります。正義と言えば公正。正義、公正。「正義と公正は一緒に出てくるね」みたいな。この一緒に出てくる言葉は、何なのかということも知るの大切です。

大切な理由はいっぱいありますから、分けなくてはいけないんです。何かで分類しないとけない。分けて「この言葉は大体この5つかな」とか、「この意味で使ってるのはこの箇所かな」ということを分けておかないとわかりませんので、分けるときに、たくさん出てくる箇所、一緒に出てくる言葉が役に立つわけです。

例えば、数字で言うと、数字なんですけど「7」という数字単体で出てくるというよりは、数字なので単位があるわけですね。日、7日、7週、7月という単位がある。7回、7度、7人。単位がありますので、日週月年で言うと、これは時間についての区分を言ってるグループになりますよね。7回、7度、これは繰り返している回数について言ってるんだというふうに、分ける時に一緒に出てくる言葉、概念というのが役に立つわけです。

例えば、7という数字で見たら、芋づる式でやると何百箇所も出てきてしまいます。それでも、7の最初が安息日だということは、みんな7って何だろうと思った時には、そこに行きますね。それと黙示録。黙示録には、7つのラッパ、7つの鉢、7つの教会、7つの巻物、たくさん出てきます。7だらけだということは思い出すものですね。探してみると、レビ記に7が多いんだ。7回ふりかける。民数記のところにも7っていうのがあるんだね。儀式の中でレビ記、民数記で7回と出てくるんだ。ヨシュアの最初のところに、カナンの地に入った時に、最初にエリコの町を7度回る。7日目には7回ラッパを吹

き鳴らすみたいなの、7の7の7みたいなの、ヨシュア記には出てくるんだねという固まっているところを見るわけです。

レビ記の中にヨベルの年があります。特にヨベルというのは、雄羊の角の年みたいな言い方なのですが、ここに7の7のと出てきます。7の7というと49。49という数字を見たら、7の倍数だということを思い出さないといけない数字なのですね。

ヨベルの年は、この次の年の50年目なのです。50という数字を見たら、7の7倍が終わった年というのが50。御霊が与えられたとき、五旬節って言いますが、旬っていうのは10のかたまりのことを旬というのです。月の上旬、中旬、下旬という言い方は、最初の10日、真ん中の10日、最後の10日のことを上旬、中旬、下旬と言います。五旬節というのは、50の祭り。

50の祭りというのは、49の次の50ということですから、7の7倍、7週の祭りと言います。7ウィークですから、7の7週ですね。週は7日ですから、7週の祭りというのはこの日に行われると。そういうものを490というのを聞いた時に、「ヨベルの年、安息日、安息日が7回きたもの」というように連想するような数字です。

仮庵の祭りは7月の祭りですけども、このように見てくると、7は、祭りというものに、とっても関係しているということが、こういうものを見ていくとわかっていって「完成する、全部が終わる、全部が全うされる、十分な日、豊かになっている、全世界、七つの民」。そういう意味で、完成とか、完全というものを表してるんだねと。

「7つ揃ったら全部がひとつです」というよりは、この箇所を見ていくと、時間が経った終わりに、全部が完成するような印象があります。というようなことを見つつ、7つの悪霊を癒していただいたマリアと、7度きよめられたミリアムと。これは、この7という数字がなかったら連想が薄いでしょう。マリアとミリアムだけでは、7つの悪霊を癒していただいたマリアじゃなくて、5つの悪霊を癒して頂いたマリアと言ったら、これは連携しなくなってしまいますよね。

ですから、わざわざ7つという言い方をしている時には、どこかの箇所を連想させるためのしるしです。「他の箇所、あの箇所を思い出してね。この箇所を思い出してね。その箇所は、実はこの箇所、この箇所と続いていますよ。」っていう、その芽づるですね。どのつるにくっついてる芋なのかは、ちゃんと把握しなければいけないという意味で分けるんですね。

数字自体は、何かの意味があるということではなくて、それは辞書的に、「7は完全完成という言葉だということなので、7日目、レビ記の箇所、黙示録のところは完全を表してるんだ」ということでは逆なんですね。そうじゃなくて、こちらの元々のストーリー、言葉は生きていますので、最初に言ったらそれだけではないのです。

その7、7日っていうのが、どんどんどんどん発展していつているから、創造の7日目に7と言った時と、レビ記で7と言った時と、黙示録で7と言ってる時と、どんどんどんどん意味が深まって、広がって正確になって清められていつているという意味では生きていますので、7は完全と止まっているものとして覚えるというよりは、生きています言葉として、その7という数字は扱わなければいけないと。

この逆になってしまうのは、占みたいなのです。占いというのは、「1はこれを表しています。2はこれを表しています。7はこれを表しています。あなたは7という数字にあったんだったら、こういう意味じゃないですか。」みたいなのが占いです。

それは、逆です。7に意味があるというよりは、7を通して、神様の導いたストーリーを思い出さなければいけないというのが、この言葉で連想させて、その出来事、導きを思い出させるように書く書き方が、聖書の言葉の定義です。普通の言葉もそうなのですから。

そのように言葉を理解することなので、クロスリファレンスがたくさんつてますよね。ああやって他の箇所を連想しながら、その言葉を定義するという方法で、御言葉の中の言葉は定義されてるということです。

というようなことでこの7の数字を自分で検索して、「確かにヨベルのところにあるね。ヨベルのところに角笛がある、角笛はヨシュアの時にも鳴らしているね。」というようなことを見つけていくと、自分の言葉として蓄えられていくというものだと思います。